

講演会、研究会記録

題 目 第9回 英米文学科 教職について卒業生の会

日 時 2010年7月31日(土)10時から12時まで

会 場 成蹊大学1号館301教室

参加者 約15名

まず、国際教育センター常勤講師の林千賀氏により、“Student Drawings as a Qualitative Evaluation Tool for Professional Teacher Development”と題して、学習者が英語や英語学習に対してどのようなイメージを持っているのか教師が知るために、学習者に絵をかかせそれを読み取る方法を披露してもらった。アンケートでは自由記述が一般的であるが、絵を使うことにより学習者の潜在的な心理も読み取ることができ、教師と学習者のラポールを作るのに参考になることがわかった。

次に文学部英米文学科准教授の森住史氏により、「英語教育に生かす通訳技法」の講義が行われた。現在も通訳者として活躍中の森住氏はさまざまな技法を概観し、実際にシャドウイング、ディクテーション、パラフレージング、逐次通訳法を参加者に実践させることにより、通訳者養成レベルと学校教育の場面での応用方法について違いを明らかにしつつ有益な指導を行った。

題 目 フィンランドにおける質の高い教育実践の実際 高学力を支える個別のニーズに応じた教師の支援とは

講 師 Matti Kuorelahti (フィンランド、ユヴァスキュラ大学・オウル大学教育学部教授)

通訳 小野尚美 (成蹊大学文学部英米文学科教授)

日 時 2010年10月14日

場 所 成蹊大学3号館303教室

聴講者 約100名

文学部学会と日本LD学会・特別支援教育士資格認定協会の共催で行なわれ、成蹊大学卒業生を含む教員や学内外の学生、研究者などが参加した。OECDによって行なわれている国際学力テストPISAでフィンランドは世界一の成績をあげているが、その背景に特別ニーズ教育が幅広い対象に行なわれていることがあるという見地からの分析が紹介された。とくに最近、障害児に対する特別教育からすべての児童生徒を含むサポートサービスへという転換が行われ、障害の有無にかかわらず、一人一人に応じる連続性のある柔軟な支援システムによる教育の実践がめざされているということである。誰もが質の高い教育にアクセスでき、参加できるというインクルーシブ教育の実践の課題とその要件についての興味深い講演であった。

**題 目：千葉ロッテマリーンズのターンアラウンド（球団改革）の実際 企業の革新をスポーツ
経営から学ぶ**

講 師：小寺昇二さん

（元千葉ロッテマリーンズ経営企画室長）

日 時：2010年10月29日（金）13時10分から14時40分

場 所：8 - 601

参加人数：約80名

プロスポーツクラブの経営改革におけるベンチマーク（お手本）として知られる千葉ロッテマリーンズの球団改革を、経営企画室長として主導した小寺さんを講師に迎え、文学部学会講演会を行いました。学生に「企業というもの」あるいは今実業界で求められている改革というものについて具体的なイメージを持ってもらうことがこの講演会の目的です。

以下、講演内容の概要を紹介いたします。

改革前の2004年までは12球団中最低の球団と言われていました（観客動員数が12球団最低、事務所には時代遅れのPCが2台しかない遅れた状況）。

改革を始めるにあたってはまず、経営トップの改革についての固い決意に基づくコーポレートガバナンスの確立が図られました。コーポレートガバナンスとは企業がそれにより指揮され統制される社内システムであり、内部統制よりも何よりもまず企業運営（改革）のための適切な意思決定と実践を継続的に行うためのものです。改革のためには明確な理念をもつことが必要ですが、スポーツビジネスは高い公共性を持ち、ステークホルダーの支援を取り付けながら改革を行わなければならないので、一般企業よりさらにこの理念が重要です。

マリーンズでは、「集客」をキーワードに、応援する球団がたとえ負けてもスタジアムに行くことが「楽しい」と感じられるようスタジアム運営の内容を変え、「勝ち」から「価値」へとスポーツマネジメントの新パラダイムを打ちたてました。この改革は、地元のファン、地域との結びつきを大切にしながら行われました。マリーンズが優勝した際には、地元住民主導でパレードが組織され、パレード終了後わずか15分で大量に捲かれた紙ふぶきが住民たち自身の手で回収されました。

ビジネス面での結果としては、3年間で売上を4倍に伸ばすという実績をあげましたが、千葉ロッテマリーンズがより多くのファンに支持される球団になったこと、地元の人々により楽しんでもらえる場をさまざまに提供出来るようになったこと、地域経済にも貢献できたこと、は地域における企業（大学のような組織も含む）のあり方について多くの示唆を含んでいます。

改革のためには、危機感の醸造と共有、トップの決意とコミットメント、そして、志ある実行部隊（改革チーム）が不可欠です。そして、「情熱」と「知性」が大切です。これはスポーツ組織に限らずいかなる業種の企業においてもあてはまるし、大学のサークルやボランティア団体、そして

各人の日々の生活の組み立てにも生かすことが出来ます。

なお、この講演会は、学生たちの発案、企画、運営で実現したものです。私の「イギリスの歴史と文化B」で小寺さんに「プレミアリーグはなぜ世界一エキサイティングなリーグに成長したのか」という講演を行ってもらう予定をゼミの学生に話したら、是非、千葉ロッテマリーンズの球団改革の話も聞きたい、というので、小寺さんに、もうひとつ講演をやってもらえるか交渉したところ、快く引き受けてくださいました。

ゼミの中で実行委員会を作り、実行委員会MLを立ち上げ、チラシ作成や講演会実施までの手順やスケジュールリングなど、小寺さんの助言を受けながら準備しました。実行委員の学生たちにとっては、トップビジネスマンから手取り足取り指導を受けるという、またとない貴重な機会となりました。

小寺さんからは、成蹊大学の学生は、素直で真面目で行動力があり、可能性に満ちていると誉めいただきました。講演後の質疑応答の時間に学生たちの間から次々と手が挙がったのも私にとって嬉しいことでした。

講演を聞きに来た学生たちはおおいに刺激を受け、「企業で働くということに興味を持てるようになった」「PDCAを普段の生活でも実践していきたい」「志や情熱をもって努力を重ねていきたい」「社会人になったら最終的に社会貢献が出来るようにその企業を引っ張っていきたい」などの言葉をリアクションペーパーに書いてくれました。

また、「今後またこういう講演をやってほしい」という声が多数ありました。ビジネス経験のある人の具体的な話は学生たちに刺激となりますし、卒業後の職業生活への見通しをもつことは、現時点での大学での勉学に意欲的に取り組む態度の醸成にも役立つと思いますので、今後も、学生と一緒にこうした企画に取り組んでいきたいと思っています。